ISSN 2186-1102

身延山資料叢書　五

目録集　五

身延山大学　東洋文化研究所

身延山資料叢書　五

目録集　五

身延山大学　東洋文化研究所

目次

序……2
日暹筆『書籍目録』……7

序

身延文庫典籍資料の概要については、『身延文庫典籍目録』全三巻（上・中・下、二〇〇三～〇五年）として身延山久遠寺より刊行されている。

本巻に収録した身延山久遠寺第二十六世日暹筆『書籍目録』（一冊）は、山梨県南巨摩郡身延町の身延山久遠寺内にある身延文庫に所蔵されている。本書影印は原本保護の側面より一部に不十分な箇所もあるが、了とされたい。

本巻で扱う日暹筆『書籍目録』の書誌情報は左記の通りである。解説にあたり、筆者である日暹および本書の内容について、身延山大学東洋文化研究所主任 木村中一が担当した。

身延山久遠寺第二十六世日暹筆『書籍目録』一冊

・法　　量（全体）三〇・七×二一・五／（題簽）二三・四×三・九

・架蔵番号（部）当山　第廿六世／（著者）日暹／（號）A、94／（冊）1

・署　　名「霊寶目録」

※本巻には身延文庫所蔵本修補作業時（時期不明）に新たな表紙が付された。本巻においてこの新表紙を「表紙」、元表紙を「元表紙」と表記する。

日暹について

身延山久遠寺第二十六世智見院日暹（一五八六～一六四八　以下、日暹と略記す）は、永野土佐守某の母の養子であった浦井宗府の次男として生まれる。弟には立正院日揚（鷹ヶ峯檀林第三世）通心院日境（身延山久遠寺第二十七世）がいる。日暹は身延山久遠寺第二十二世心性院日遠に師事し教学研鑽に励むと、その才覚を発揮し人々は「富楼那日暹」と呼んで賞賛したという。日暹は小西檀林に請われ化主となり、その後に元和九年（一六二三）京都本満寺第十一世へと晋むこととなる。さらに寛永四年（一六二七）には叔父師匠にあたる身延山久遠寺第二十一世寂照院日乾の推挙もあって鷹ヶ峯檀林に迎えられ、日乾を檀林開祖、日暹自らは檀林開講の初祖となった。しかし翌五年に日暹は身延山久遠寺第二十六世として晋山したため、俗弟の立正院日揚を鷹ヶ峯に招き第三世とした。

日暹が身延に晋んだ時代は受・不施論争の真っ只中にあって、池上本門寺の長遠院日樹が仏性院日奥の「不受不施義」に共鳴して受派を否定していた。特に身延山の受派思想を方々において批判しており、身延山へと登詣するものは堕地獄であると高唱するに至っては、ついに宗門の教義問題が身延池上の問題へと発展していくのである。日暹は日樹の主張に黙認していることができず、日乾・日遠の援護をうけながら直ちに寛永六年（一六二九）二月二十六日に江戸寺社奉行へと日樹を訴え、同年十一月十五日再び奉行に上申した。日樹も翌七年二月二十一日に返答書を作成し奉行所へと提出すると、ついに幕府は寛永七年に身延・池上の両方の代表者を江戸城へと招し対論することとなった。この「身池対論」おいて幕府は日暹側（身延側・受派）を勝利、日樹側（池上側・不受派）を有罪と決して、日樹には池上退去を命じて碑文谷法華寺の日進とともに信州（日樹は伊奈郡飯田、日進は上田）へと配流、また中山法華経寺隠居の日賢は遠州へ、平賀本土寺日弘は伊豆へ、中村檀林の日充と小西檀林の日領は奥州（日充は岩城、日領は相馬）へとそれぞれ配流とした。またあわせて不受不施思想に傾倒する

者は追放もしくは流罪されることとなった。さらに池上には日遠が、妙覚寺には日乾が幕府の命により住することとなり、この対論は一応の決着をみるのであるが、不受派の姿勢は依然として衰えることはなかったのである。日暹もまた江戸にしばらくの間残ることとなり、不受派の追討に努めたという。そして慶安元年（一六四八）五月二十九日に病臥に倒れ遷化する、六十三歳であった。

『書籍目録』の書誌学的考察

本『書籍目録』は全七十三丁（目次部含む）からなり、元表紙には身延山久遠寺第二十七世通心院日境の筆であろう「身延文庫／暹師御書籍目録／日境（花押）」との題が記されている。本書の構成を概観すると、大きくは「内典目録」と「外典目録」からなる。それぞれの考察は次に譲るが、各目録には「一之箱」「二之箱」という記載が確認できることから本書が過去に身延山久遠寺（身延文庫）に架蔵されていた典籍の目録であることが推察できる。また元表紙の次には本書目次（一丁）とおぼしき書き入れ（他筆か）も確認することができる。

さて、各目録部についてみると、まず「内典目録」である。内典とあるように仏教関係典籍の目録である「内典目録」は全三十二丁からなり、全十四箱に収蔵されていたであろう書籍類が確認できる。その詳細をみると、

【『書籍目録』「内典目録」】

「朝師一之箱」　一丁表～三丁表　「一之箱」　四丁表～七丁表
「二之箱」　八丁表～八丁裏　「三之箱」　九丁表～一二丁裏
「四之箱」　一三丁表～一三丁裏　「五之箱」　一四丁表～一八丁裏
「六之箱」　一九丁表～一九丁裏　「七之箱」　二〇丁表
「八之箱」　二一丁表～二三丁表　「九箱」　二四丁表～二五丁表

「十之箱」　二六丁表～二七丁表　「十一之箱」　二八丁表～二八丁裏
「十二之箱」　二九丁表～三〇丁裏　「十三ノ箱」　三一丁表～三二丁裏

〈「　」内の箱表記は原本による〉

となる。先の本書目次部をみると、内典目録部が十三箱に配当されている表記を確認できるが、実際には一丁表から三丁表までは「朝師一之箱」（一丁表）また「已上御書抄分」（三丁表）との記載より、この部分は身延山久遠寺第十一世行学院日朝の著作分を別分とし、その後に再度「一之箱」（四丁表）と始まり、三十一丁表には「十三ノ箱」との記載があることより「内典目録」部は都合全十四箱に収蔵される典籍の目録であるといえよう。

次に「外典目録」である。「外典目録」は全三十八丁からなり、全十六箱に収蔵されていたであろう書籍類を確認できる。その詳細をみると、

【『書籍目録』「外典目録」】

「一之箱」　三五丁表～三五丁裏　「二之箱」　三六丁表～三八丁裏表
「三箱」　三九丁表～三九丁裏　「四之箱」　四〇丁表～四〇丁裏
「五之箱」　四一丁表～四三丁裏　「六之箱」　四四丁表～四四丁裏
「七之箱」　四五丁表～四七丁表　「八之箱」　四八丁表～四九丁表
「九之箱」　五〇丁表～五四丁裏　「十之箱」　五五丁表～五八丁表
「十一之箱」　五九丁表～六一丁裏　「十二箱」　六二丁表
「十三之箱」　六二丁裏～六三丁表　「十四箱」　六四丁表～六八丁裏
「十五箱」　六九丁表～七〇丁表　「十六之箱」　七一丁表～七二丁裏

〈「　」内の箱表記は原本による〉

である。外典ということで「易」（五〇丁表）や「易抄」（五〇丁裏）、「春秋」（四九丁表）などの儒教関係典籍が収録されているのは当然のこと、幼学（初等教育）のテキストとされる「蒙求」（三六丁裏）「蒙求抄」（三七丁表）や中国の詩文選集である「文選」（三九丁表）さらに「史記」や「方丈記」、「日本紀」などの多岐にわたる典籍の記載が確認でき、「本草叙」（五六丁裏）「醫方大成論」「醫方大成論鈔」（五八丁表）の医学書も確認できる。また「蒙求」などは複数回記載されている（三六丁表、三八丁表、五三丁裏）ことより、当時身延文庫かに収蔵にされていた典籍（箱に収蔵された典籍）が目録化されたのが本書であろうと推察できるのである。

結　言

以上、日暹筆『書籍目録』についてみた。本書は収録されている書籍がどの箱に収蔵されているかが記載されていることより、本書が日暹の時代に身延山にあった典籍を目録化したものであろうということがわかる。また当時の収蔵の様子が「内典」と「外典」に分類されて架蔵されていたことも本書より推察できる。つまり本書は、当時身延にあった典籍がどのようなものであったか、またどのように収蔵されていたかを考察する一級資料として大変貴重なものであるといえるのである。

【木村中一　記】

本書を収録刊行するに当たっては、所蔵者である身延山久遠寺御当局のご理解とご許可を賜った。また身延文庫及び宝物館の関係各位には、原本の調査に特別のご高配を頂いた。記して感謝申し上げる。

日暹筆『書籍目録』

身延山資料叢書　五　目録集　五

平成二十七年三月三十一日　発行

編集（本巻担当）
身延山大学東洋文化研究所　木村中一

発行所　身延山大学　東洋文化研究所
〒四〇九―二五九七
山梨県南巨摩郡身延町身延三五六七
TEL（〇五五六）六二―〇一〇七

ISSN 2186-1102